昭和六十三年十二月二十八日第三種郵便物認可
令和六年九月一日発行（毎月一回一日発行）第四三八号

# 俳句研究

## 九　月　号

花鳥諷詠　　9月号（438号）　日本伝統俳句協会

# 花鳥諷詠®

令和６年９月■第438号 ―――― 目 次


花鳥諷詠選集 …… 山田　佳乃 …… 2
小杉伸一路 …… 4

この人の作品 …… 尚山　和桜 …… 7

一頁の鑑賞 …… 如月　真菜 …… 8
内藤　花六 …… 9

卯浪 ……10

虚子研究　『六百五十句』研究（55）……11

筑紫磐井氏に聞く（1）…… 井上　泰至 ……17

受賞者に聞く　新人賞「栞紐」…… 一倉　小鳥 ……22

令和七年（2025年）俳句カレンダー募集句入選者 ……24

書評 …… 今井　肖子 ……27

風報 ……28

地区行事開催日程表 ……31
編集後記 ……32



「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。


**表紙**　虚子輯『さしゑ』より「つり」中村不折画

# 花鳥諷詠選集

## ●山田佳乃選

### 特選五句

一病の故の息災夏大根　横浜　開米遊子

緑さす白紙もて結ふ巫女の髪　天理　松田吉上

玉葱のほつたらかされゐて育つ　長岡京　藤堂くにを

古簾ふた重に掛けて独り住む　高松　白根純子

青鷺の狙ひ外さぬ構へかな　神戸　小柴智子

二句短評

一句目――息災は誰しも願うことだが、なかなか思うようにいかない。作者は以前大病をされたのかと思う。病後はいろいろ気をつけるので大病をすることもなくなるのだろう。「夏大根」がこの句を引き締め、実感のある一句にしている。

二句目――奉書紙で作られた元結は艶やかな髪を美しく見せる。緑の黒髪とも言うように「緑さす」と「髪」が響き合う。新緑の杜を行き来する巫女の黒髪と元結の白い紙が清らかに描かれる。

### 入選六十句

十薬のにほひ吐き切るまで干され　京都　本谷眞治郎

雨霽の夕べ纏へる藻刈舟　高知　河野紅柳

たまゆらの翅の戦ぎや糸蜻蛉　神戸　前田容宏

空の色ぬけ出す風の花樗　大牟田　森永清子

歳月を辿りし黴の一書かな　和歌山　市ノ瀬翔子

麦秋を縫うて蛇行の筑後川　鳥栖　西山惠二

軽暖やリュックに二つ塩むすび　東京　勝又洋子

隠沼の日向へも出て軽鴨親子　金沢　中村曜子

初蛙古代の森を覚ましゆく　福岡　沖永洋美

赤錆の廃線つづく夏野原　大阪　中本宙

薫風や少年虚子の山河訪ふ　今治　比留木のぶ子

梯子掛けねばの深さや溝浚へ　神戸　島崎すずらん

五月晴遊行柳へ誘ふ風　浜松　朝井治代

白の無垢紫の艶花菖蒲　大川　今泉美代

紫陽花の今少年のやうな青　能代　三上乃婦子

神木と一体となる青葉木菟　太宰府　白石　照子

油虫大騒ぎしてひとりかな　東京　加川　尚美

花菖蒲川面に揺るる江戸情緒　草津　田中　幸湖

騒然と湧き整然と蟻の列　市原　飯塚　咲子

行きに寄り帰りに寄りぬ苗木市　姶良　五反田加代

二の丸の藪蚊の数をあなどりし　浜田　田中　靜龍

梅雨空や切り岸に立つ岬馬　諫早　安原さえこ

婚約の薔薇百本を抱く娘　久留米　矢野　愛子

ナイターや回追ふ毎の空の色　神戸　片岡　橙更

百歳は一つの節目花に酌む　福山　槙岡　義道

梅雨冷や株価に残る五十銭　鹿児島　青野　優子

応援の熱気にたたむ日傘かな　堺　杉山千恵子

五月雨るゝ森が奏でる千の音　茅ヶ崎　川口みさえ

木天蓼や七戸の里へ入る小径　島根　猪俣　北洞

住み捨てし炭坑跡の蕗を刈る　北海道　髙間ヨシヱ

緑蔭に濡れ陶榻に人を待つ　香川　柴田　禮美

駅前のカレーの匂ふ薄暑かな　鹿児島　西村正一郎

扉なき慈悲の山門朴の花　荒尾　大川内みのる

音立ててものの煮えをり若葉寒　松江　松嶋　民子

水に皺よせて亀の子浮いてきし　松原　加藤　あや

麦飯や大きな梁の黒光り　芦屋　門脇　重子

草すれすれ人すれすれや夏燕　藤岡　飯塚　柚花

何や彼やありし菜園根切虫　西予　三瀬　教世

一睡の夢と散りたる沙羅の花　伊賀　藤井　光子

新聞を読むかのやうに蜘蛛歩く　東京　寺崎三枝子

夏座敷仕舞へる物はみな仕舞ひ　備前　白石　昌弘

分校を映す植田の二枚ほど　福岡　芳野　加代

紫陽花や雨のち曇りのち薄日　糸島　宮脇　睦子

傾ぎ出づ一帆の澪風薫る　神戸　田中あかね

薫風や仔山羊の首に金の鈴　福岡　野口　明子

早口を競ふがごとき燕かな　福山　早間　幸枝

紙魚疾し大言海へもぐり込む　宇佐　磯永喜八郎

体よりはみ出す声や雨蛙　神戸　光山　惠子

灯されて雛の影おく緋毛氈　西予　黒田　美穂

風船に片手あづけて飛びたき日　柏原　鈴木兵十郎

風の来て一気に加速夏の蝶　松山　門田　安世

あやめ咲く嫁入舟に囃舟　東京　川原　千秋

子蟷螂葉裏にうすき影を差す　鹿児島　柳橋　宏子

カラフルな帆の出揃ひて初夏の海　倉敷　中田　鈴江

夏場所や能登の力士に沸き返る　金沢　西野久仁夫

門前に下駄の音して山笠来たる　福岡　塚田　由美

名水の案内板や滴れる　朝来　佐竹美保子

三川を集めて猛る男梅雨　東大阪　梶田　高清

石橋の隠し十字架月見草　春日　本田　久子

## ●小杉伸一路選

### 特選五句

薫風に乗り吉報の届きけり　川崎　飯川　三無

また一戸離農の畑の草茂る　小千谷　大矢　あきこ

またしても期待の苗を根切虫　宝塚　一瓶　美奈子

一滴の雨の豹変梅雨出水　神戸　岩水　ひとみ

新茶汲む静かな音に立つかをり　西脇　岸本　悦子

二句短評

一句目――どんな吉報か分からないが、それが薫風に乗って届いたのだ。春風が乗せて来るのは進学や就職の報せ。では薫風はどんな報せを乗せて来るのか。私は嬰児誕生の報だと思う。季題の働きが良い句だ。

二句目――「また」という表現から、作者の居られる地域では離農が相次いでいることが分かる。少子高齢化が進む集落では、どこでも何じ様な問題を抱えている。目を逸らすことなく見詰めて行くことも、俳人の仕事だ。

# 入選六十句

誰も皆無言なりけり大瀑布　苫小牧　杉山　桂子
十薬のにほひ吐き切るまで干され　京都　本谷眞治郎
しばらくを秘仏の里の薫風に　生駒　南　純子
麦の穂の出揃ひ父の忌の近き　高山　原田　尚子
快気てふ文添へ新茶届きけり　福岡　三坂　一生
これからの暑さ思ひゐる暑さ　浜田　田中由紀子
駄菓子屋は子どもの砦夏燕　大阪　福本めぐみ
歳月を辿りし黴の一書かな　和歌山　市ノ瀬翔子
眼帯のとれて青葉の只中に　加賀　出島　達子
そのことの過去となりゆく糸取女　高槻　林　曜子
我思ふ故に吾在り葦茂る　高知　栗坂　海馬
緑さす白紙もて結ふ巫女の髪　天理　松田　吉上
梯子掛けねばの深さや溝浚へ　神戸　島崎すずらん
薔薇百花汀子の赤を探しけり　今治　横田青天子
見開きて見詰む子鹿の瞳かな　廿日市　齋藤　金二

新刊書ひらくときめき春灯　東京　庄嶋　里子
波音に負けず松蟬鳴き始む　徳島　遠藤　和良
よき話苦労話や古茶新茶　倉敷　辻田　百代
子供の日子等公園の風となる　大牟田　猿渡　章子
吹くだけで楽し草笛鳴らずとも　稲城　福島テツ子
空と海溶けあふブルー風薫る　金沢　三島由紀子
草笛や教はりし師へレクイエム　姫路　黒田千賀子
代代の女系の家に鯉のぼり　神戸　石角　節子
花菖蒲川面に揺るる江戸情緒　草津　田中　幸湖
二の丸の藪蚊の数をあなどりし　浜田　田中　靜龍
ささやかな退院祝新茶汲む　諫早　篠崎　清明
白鷺の着地の軽さ夏来る　羽生　塩田　章子
空き家には家族の歴史苔の花　山形　揚妻　愛子
婚約の薔薇百本を抱く娘　久留米　矢野　愛子
独唱の多重唱へと田の蛙　柏　内田　秋歩

百歳は一つの節目花に酌む　福山　槙岡　義道

ソーダ水ひと日で終る恋もあり　熊本　西　美愛子

採れさうで採れぬ距離なり枇杷実る　つくば　大倉真知子

遠雷の近付く気配樹々騒ぐ　横浜　久保　理恵

命ある幸せに汲む新茶の香　久留米　秋吉　鈴子

真青なる海に飛魚突き刺さる　横浜　松永　朔風

外つ国へ赴任の決まり夏祓　八尾　淺井　祥多

山葵田や風も日差もわさび色　長岡　安井　里子

母の日に子にわがままを一つだけ　高知　沢田　佳代

一病の故の息災夏大根　横浜　開米　遊子

ウクレレのフォークソングや昭和の日　高松　塩田八寿子

雨を得て草茂りたる速さかな　七尾　松本　慶子

ハイタッチしたき裸婦像夏来る　福岡　阿部　弘子

癒えし身を喜び合うてさくらんぼ　白岡　小林カヨ子

嘘に嘘重ねて看取る万愚節　箕面　須知香代子

ついりして日本列島重くなる　伊賀　松村　咲子

紫陽花の彩を仕上げて昨夜の雨　宇佐　水野　公明

千年の歴史をくぐりゆく茅の輪　宇佐　熊埜御堂義昭

志持つて二十歳の夏に入る　浜田　三沢　孝子

迫り来る山万緑の重さかな　朝来　枚田登志子

竹落葉時を埋めてをりにけり　八千代　向阪　由紀

万緑の生きる勢ひを貰ひけり　姫路　上原　康子

頭からどうぞと鮎の姿焼　金沢　中田　康子

でで虫の引越し自由なる暮し　高知　中村　梅子

草も木も子の背も伸びる五月かな　東京　大原　栄子

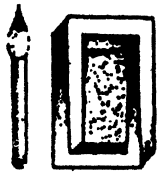
そよ風に影の崩るる代田かな　鹿児島　角屋敷昭子

カラフルな帆の出揃ひて初夏の海　倉敷　中田　鈴江

水色の風を流して川涼し　白山　辰巳　葉流

十薬の白き暗がり無縁塚　武蔵村山　福留　和江

一枚の空一枚の麦の秋　鳥栖　緒方　輝子



## 編集後記

稲妻を踏みて跣足の女哉　　虚子

稲妻がしきりに光っている。その地に落ちた光を女は踏んでいる。「神鳴」と違って「稲妻」は、光が一閃し、暗転することに焦点が当たるので、女の素足は、見えたり見えなかったりしているのだ。女は何故「跣足」で外に出ているのか？何か危急のことがあってのことに相違ない。「て」は無造作に使うと、何が何してどうなったとなり、句集に多いと賞の落選の理由になるとも聞く。逆にこの「て」は、一閃と暗転に踏み出す緊張感を示している。

○第3回虚子生誕一五〇周年オンライン講座が八日に迫って参りました。「ホトトギス」の絵の魅力が、いかにして生まれたものかがテーマとなります。また、その魅力は、協会発行のカレンダーにもあらわれています。「稲妻」の句のような、絵になる場面がいかにして生まれるのか味わうことも、作句の一助になるものと思います。

○筑紫磐井氏の虚子研究について、インタビューをいたしました。「外」からの視点が、かえって虚子の詠法を客観的に洗い出せる場合もあります。異質な世界と比較した時、物事の本質は、「一閃」されるものでもありましょう。俳句や協会に対する意見は違っても、虚子の研究に有益な言説は、共有し意見交換していく。そのような開かれた「器」として、本誌を発展させていきたいと考えています。

○来月の郵便費改訂に伴い、本誌の定価を上げることにいたしました。会費とは関係ございませんので、念のため。

（井上泰至）

**●花鳥諷詠選選者予定**

| 掲載 | 締切り | 選者 |
|---|---|---|
| 12月号 | 9月20日 | 岩岡中正 内藤花六 |
| 1月号 | 10月20日 | 山田佳乃 佐伯緋路 |
| 2月号 | 11月20日 | 岩岡中正 藤井啓子 |
| 3月号 | 12月20日 | 山田佳乃 三村純也 |

**花鳥諷詠 九月号（通巻第四三八号）**
定価一〇〇〇円　但し、本代は年会費に含む
**年会費一〇、〇〇〇円**
令和六年九月一日
発行人　岩岡中正
発行所　**公益社団法人 日本伝統俳句協会**
〒151-0073　東京都渋谷区笹塚二-一八-九 シャンブル笹塚二-B一〇一
電話　〇三-三四五四-五一九一
FAX　〇三-三四五四-五一九二
郵便振替口座番号　〇〇一六〇-七-一八六八二〇
印刷所　日本ハイコム㈱
〒112-0014　東京都文京区関口一-一九-二